

木村定三コレクション環頭大刀・耳環目録

京都大学白眉センター 金 宇大

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、古墳時代の環頭大刀および耳環を紹介するものである。
- ・収納箱に木村定三氏がつけたとみられる名称が記されているものもあるが、本目録への掲載に際し、現在の分類における一般的な名称に改めた。
- ・記載内容は、コレクション番号、資料名称、法量、重量、調査・検討所見、実測図からなる。
- ・蛍光X線分析装置による測定作業を長屋葉津子氏がおこない、その結果を所見に活用した。

環頭大刀



1 M318 単龍環頭大刀柄頭

全長9.3cm

外環径5.5cm（短軸）・7.2cm（長軸）

外環厚1.0cm

茎部長3.8cm 茎部幅2.0～2.5cm

茎部厚0.3～0.6cm

古墳時代後期（6世紀）

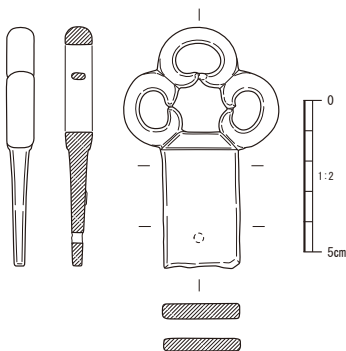
環の内部に1匹の龍首を配した、いわゆる「単龍環頭大刀」の柄頭装飾である。

環頭部全体に刀身部に由来するとみられる鉄錆が回っている。環内の龍首は、長い角を後方に伸ばし、角の付け根に三つの冠首を表現する。眉、水滴形の目の下に耳が伸び、口を上下に開いて舌を出す。口内には上下の歯が表現され、口元には顎髭と三束にわかれた顎毛を蓄える。頸部には鱗状の表現が認められる。外環には2匹の龍が交差する文様を施すが、錆のため文様の詳細が判然としない。環頭部と茎の境には双連珠魚々子文を施した銀地金張ないし金銅張の貴金具片が遺存しており、茎には柄木の痕跡とみられる木質が付着している。錆のためやや明確でないが、目釘孔らしき痕跡が一つ確認される。

本例は、中心飾の各パーツの表現がほとんど形骸化しておらず、文様構成は単龍環頭大刀の祖型とされる韓国公州市武寧王陵出土例（文化財管理局1974）と近似する。文様上、単龍・単鳳環頭大刀の中でも非常に古い段階の資料と評価できる。龍首は全体的に丸みを帯びた仕上がりになっており、耳や顎髭は表裏で独立して伸びて、表裏のパーツの中間に空隙が存在している。このことから、本例は合范铸造ではなく、蠟型を用いた铸造によって製作されたと推定される。

参考文献

文化財管理局（永島暉臣慎 訳）1974『武寧王陵』学生社



2 M317 三累環頭大刀柄頭

全長8.0cm

外環径4.0cm (短軸)・5.1cm (長軸)

外環厚0.9cm

茎部長4.0cm 茎部幅2.5～2.6cm

茎部厚0.3～0.6cm

古墳時代後期後葉 (6世紀後葉)

C字形のモチーフを三つ重ねた、いわゆる「三累環頭大刀」の柄頭装飾である。

外環から茎部まで、全体に鍍金が施されている。外環を構成する各C字のモチーフは、鑄造の過程で開口部がつながっている。外環は断面D字形を呈する。基部平面にはわずかな台形状の高まりが認められる。茎は、外環と基部の接続部からまっすぐ伸び、端部付近に目釘孔が一つ確認される。

本例は、「兵庫県城崎郡江泉町字野村出土」と書かれた箱に耳環M357とともに保管されていた。しかし、その法量や外形の特徴は、戦前に発見され現在行方不明となっている「京都府福知山市大内出土」の三累環頭大刀柄頭(濱田・梅原1922)と酷似している。特に、鑄造後に断ち切った後そのまま切りっぱなしにしたとみられる茎端部のシルエットが「大内出土」資料と一致する点から、両者が同一個体である可能性は極めて高い。

本例の類例には、愛知県井田大明神古墳例、鳥取県長者ヶ平1号墳例などがあり(穴沢・馬目1983)、いずれも日本国内で出土している。

参考文献

穴沢咏光・馬目順一1983「三累環刀試論一伝・常陸岩井出土の竜紋三累環把頭を中心に」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』古代を考える会 pp.293-328

濱田耕作・梅原末治1922「慶尚北道慶尚南道古墳調査報告書」『大正7年度古蹟調査報告』第1冊 朝鮮総督府

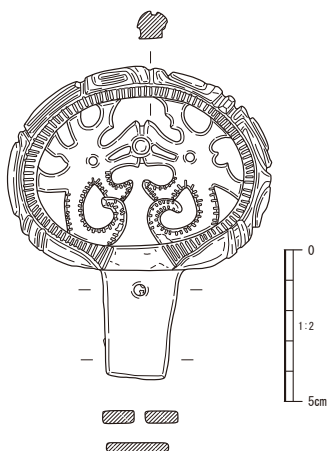
3 M319 双龍環頭大刀柄頭

全長10.3cm 外環径6.7cm (短軸)・8.7cm (長軸)

外環厚1.0cm

茎部長3.6cm 茎部幅2.0~2.7cm

茎部厚0.3~0.4cm



環の内部で2匹の向かい合った龍が珠を噛む、いわゆる「双龍環頭大刀」である。

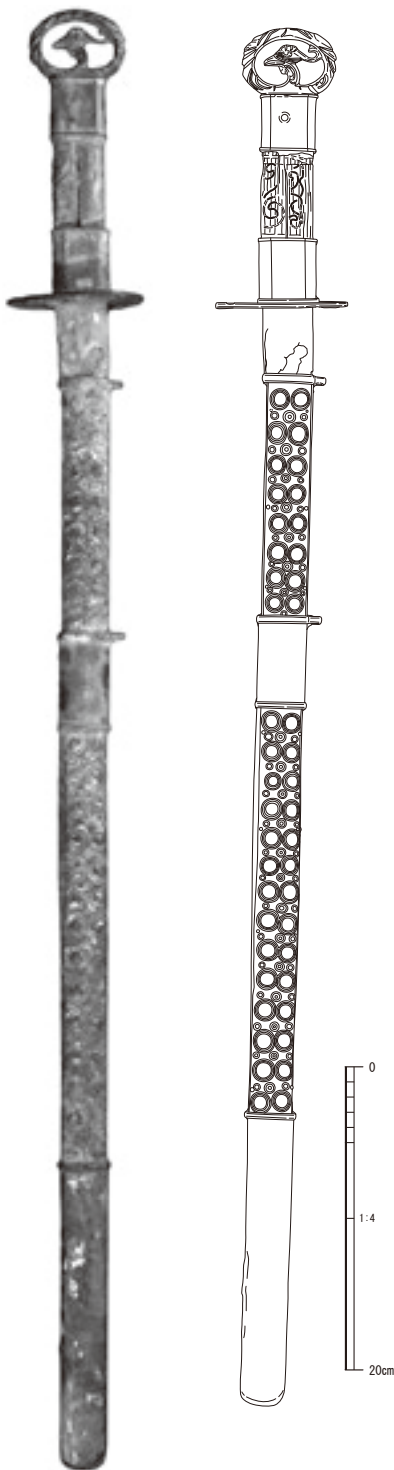
環内の龍は、冠毛が外環と一体化するなど、かなり形態化が進んでいる。ただし、2匹の龍は左右対称でなく、片方の龍は冠毛の一つが突起で表現される。一方で、外環はかなりの厚みを持ち、渦文状の外環文様をもつ。外環には段差を設けて内側を一段低くつくりだし、放射状に長方形の刻みを配する。長方形の刻みは龍文の頸髭および頸部にも施されており、幅のある長方形のタガネで打ち込まれたとみられる。外環の段差や文様は大きな高低差をもち、非常に立体的な印象を与える。茎部の付け根付近に目釘孔が一つ穿たれる。外環および中心飾に鍍金が施されるが、茎には施されない。

本例に蛍光X線分析を実施した結果、銅や金の他に亜鉛が多く検出された。一方で錫は検出されておらず、本例は、銅と亜鉛の合金、すなわち黄銅（真鍮）に鍍金を施したものとみられる。近年、青森県丹後平15号墳出土の獅嚙三累環頭大刀が黄銅製であることが判明し、古墳時代にも黄銅製品が存在することが明らかとなったものの、古墳時代では黄銅製品は一般的ではない。本例の同型品で、いくつか贋作として報告された例（山内2002、持田2017）があり、それらには筒金具の取り付けのために茎を切削改造した痕跡をもつものが含まれる。本例も、後世の模造品である可能性が高い。

参考文献

持田大輔2017「明治・大正期における個人収集品の一様相―「双龍環頭」を中心に―」『奈良県立橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第40冊 pp.59-73

山内紀嗣2002「双龍環頭把頭の真贋」『天理参考館報』第15号 天理大学出版部 pp.101-108



4 M289 単鳳環頭大刀

全長91.1cm

外環径4.3cm (短軸)・6.2cm (長軸)

柄間長13.7cm 鐔幅8.7cm 鞘長72.7cm

環内に1匹の鳳凰の頭部をあしらった「単鳳環頭柄頭」をもつ金銅装大刀である。

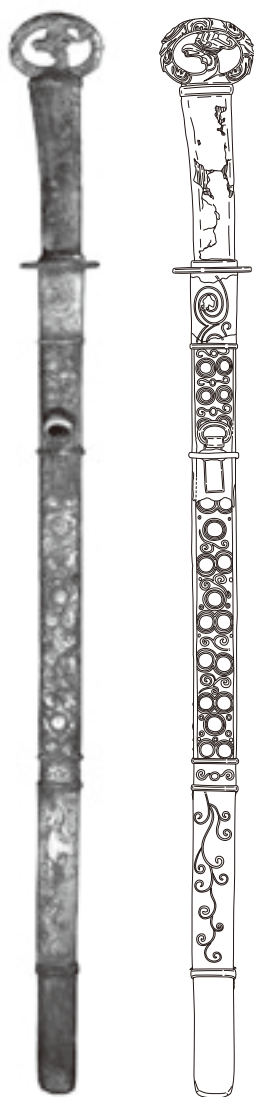
中心飾は、冠毛の表現が瘤状に退化し、嘴は閉じられ玉を嚙んでいない。角の先端が外環と一体化している。外環には、二匹の龍を背中合わせに配置する文様が表現されているとみられるが、文様の各要素が省略され、構図がはつきりしない。文様細部はタガネ彫りで仕上げたとみられ、ラインは比較的シャープである。柄は、被せた金銅板が脱落して木製の柄木が露出している。柄木の表面には二列の蔵手文を施した痕跡が認められる。柄間の両端に断面八角形を呈する筒金具を二つ取り付ける。鐔は断面倒卵形で六窓の金銅製鐔である。鐔の縁がやや高くなっており、断面T字状を呈する。鞘は木製の鞘身に金銅製の鞘巻金具を被せ、佩表面に二重円形浮文を並べた装飾版を重ねる。佩裏面には、二列の蔵手文が向かい合せに配置されている。鐔の近くと鞘の半ばに佩用のための単脚足金具が二つ認められる。鞘の先端には丸尻の鞘尾金具が採用される。

単鳳環頭大刀の図像は、日本列島で最も出土例の多い、いわゆる「龍王山系列」(穴沢・馬目1986)という型式群に属する。龍王山系列の諸例に比べると、中心飾の表現は比較的崩れていないが、一方で外環の文様構成の崩れが著しく、脚部の表現などが完全に形骸化している。こうした文様構成は既存の出土資料に類例がなく、やや異質な特徴といえる。柄の断面八角形の筒金具は龍王山系列の単鳳環頭大刀によくみられる装具であるが、通常、柄間の両端に加え、半ばに一つ、計三つ装着される。しかし本例には二つしか認められず、柄間そのものがかなり短い。また、文様を施した装飾板を巻く柄の意匠は、通常、双龍環頭大刀や頭椎大刀に採用されるもので、断面八角形の筒金具と組み合う例は知られていない。幅の広い金銅製六窓鐔は、通例では環頭大刀と組み合うことはなく、頭椎大刀などにおいてみられる装具である。これらを総合すると、本例はいくつかの非完形品のパーツをつなぎ合わせて一つの完形品につくりかえる、いわゆる「寄せ物」と判断される。それぞれの部品は真作の可能性が高いと考えるが、柄頭については上述の文様の特異性に留意しておく必要がある。

参考文献

穴沢味光・馬目順一1986「単龍・単鳳環頭大刀の編年と系列—福島県伊達郡保原町愛宕山古墳出土の単鳳環頭大刀に寄せて—」『福島考古』第27号 福島県考古学会 pp.1-22





5 M293 単鳳環頭大刀

全長71.4cm

外環径4.4cm (短軸)・6.3cm (長軸)

柄間長12.1cm 鐔幅5.2cm 鞘長54.9cm

環の内部に一匹の鳳凰首を表現した「単鳳環頭柄頭」を有する金銅装の大刀である。

中心飾の鳳凰は文様要素の形骸化が進んでおり、崩れた冠毛と角が外環と一体化し、目の表現は省略されている。嘴で玉を噛む。外環には、二匹の龍が交差して互いの胴を噛み合う「喰合型」の文様が表現されている。比較的高低差をもつ立体的なつくりであるが、文様細部のラインがシャープさを欠く。タガネ彫りでなく鑄造によって文様を表現したものとみられる。柄間および鞘は、木製の装具の上に金銅製の装飾板を被せて仕上げる。柄にはなんらかの文様が施されているが、遺存状態が悪く緑青に覆われているため、その詳細は不明である。鐔は、断面倒卵形の金銅製喰出鐔である。鞘は、木製の鞘身に唐草文を施した鞘巻金具を被せたもので、佩表にはさらに円形浮文と唐草文を組み合わせた装飾板を重ねる。佩裏面には全体に唐草文が配置されている。佩表側の鞘の半ばには、佩用のための環付足金具を付す。鞘尾の先端は丸く仕上げる。

単鳳環頭大刀は、日本の古墳から多く出土することが知られているが、鞘を含む全体の刀装がわかる例は稀である。しかし、本例のような喰出鐔に二重円形浮文を施した鞘巻金具、丸尻の鞘尾金具をもつ金銅装の鞘は、通例、双環頭大刀の中でも新しい時期の資料にともなう鞘である。こうした鞘をもつ単龍・単鳳環頭大刀が存在しないわけではないが、福島県須賀川市上川原古墳出土（大谷2010）など、基本的に単鳳環頭大刀の中でも最も時期が下る型式のものに限られている。本例の柄頭は、中心飾の図像こそ退化が進行しているものの、玉を噛む表現を残している点や、鑄造で外環文様を表出する点など、最新型式よりはやや古い要素を備えており、柄頭と鞘飾の組み合わせにやや違和感を覚える。あるいはM289同様、寄せ物の可能性がある。

参考文献

大谷晃二2010「福島県須賀川市上川原古墳出土の単鳳環頭大刀」『福島考古』第51号 福島県考古学会 pp.47-62

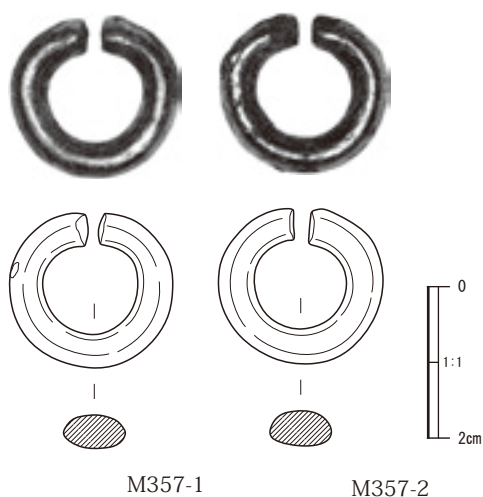


耳環

1 耳環 M357

外径2.2cm 内径1.3cm
断面径0.8cm×0.5cm 重量13g
外径2.1cm 内径1.3cm
断面径0.8cm×0.5cm 重量13g

左右1対、中実の銅芯銀張鍍金環である。全体に鍍金の残りが良く、銀板もほとんど剥離していない。開口面には鍍金が及ばない。断面径は長軸と短軸で差が大きく、扁平な形状を呈する。



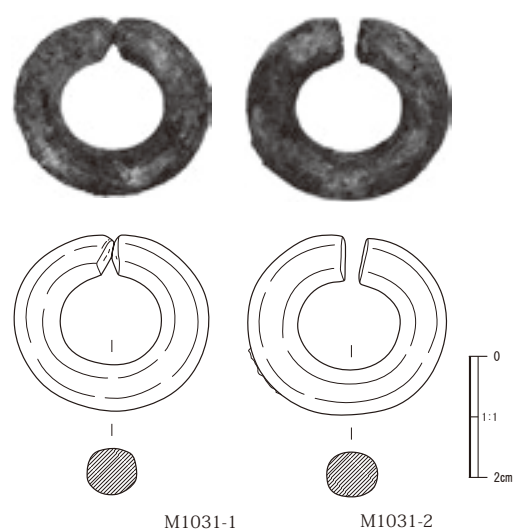
M357-1

M357-2

2 耳環 M1031

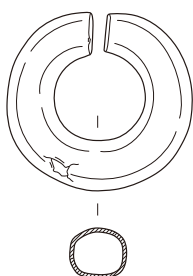
外径3.2cm 内径1.7cm
断面径0.8cm×0.8cm 重量30g
外径3.3cm 内径1.7cm
断面径0.8cm×0.7cm 重量25g

左右1対、中実の銅芯銀張鍍金環である。鍍金の残りは悪く、ほぼ全面が緑青で覆われるが、わずかな鍍金の光沢がところどころに認められる。錆のためやや不明瞭だが、銀板は開口部まで折り込まれているとみられる。



M1031-1

M1031-2



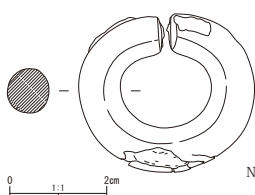
M2484

3 耳環 M2484

外径3.1cm 内径1.5cm

断面径0.9cm×0.8cm 重量7g

本コレクション唯一の中空耳環である。銅の薄板で環をつくり、表面に鍍金を施したものと考えられる。鍍金は剥落した箇所が多いが、内側面に比較的良く遺存している。開口面には別材でつくられた蓋が被せられており、蓋材にも鍍金処理がなされる。断面は隅丸方形に近い。



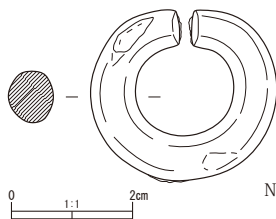
No.1

4 耳環 KT204-1

外径3.6cm 内径1.9cm

断面径0.9cm×0.9cm 重量34g

中実の銅芯銀張鍍金環である。銀板が割れて剥離した箇所がいくつか認められる。全体的に緑青が回るが、内側面を中心に鍍金が遺存する。



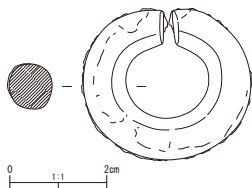
No.2

5 耳環 KT204-2

外径3.1cm 内径1.6cm

断面径0.7cm×0.8cm 重量22g

中実の銅芯銀張鍍金環である。開口部を含め、全体に銹で覆われている箇所が多いが、一部で銀板の剥離を視認できる。内側面に残った鍍金は、比較的良く発色する。



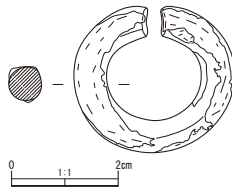
No.3

6 耳環 KT204-3

外径3.5cm 内径1.7cm

断面径0.9cm×0.9cm 重量35g

中実の銅芯銀張鍍金環である。内側面に鍍金の遺存が確認されるが、外側面は銹に覆われており、表面が荒れている。銀板は開口面にも被せられているとみられる。



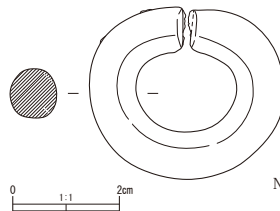
No.4

7 耳環 KT204-4

外径3.0cm 内径1.8cm

断面径0.6cm×0.6cm 重量17g

中実の銅芯環である。遺存状態が悪く、表面の劣化が進む。鍍金はわずかにしか確認できず、銅地に直接鍍金を施したのか、鍍金した銀板を巻いたのかが明確でない。



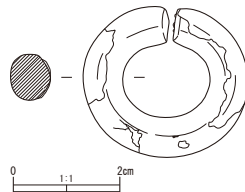
No.5

8 耳環 KT204-5

外径3.7cm、内径1.9cm、

断面径0.9cm×0.9cm 重量36g

中実の銅芯銀張鍍金環である。全体に緑青が回るが、内側面には鍍金の遺存が良く確認できる。錆でやや不明瞭だが、銀板は開口部に及んでいるとみられる。



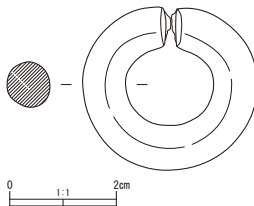
No.6

9 耳環 KT204-6

外径3.1cm、内径1.6cm、

断面径0.7cm×0.8cm 重量27g

中実の銅芯銀張鍍金環である。鍍金の状態が良く、銀板の剥離箇所が明瞭で、銅芯の表面も平滑である。内側面がやや突出した断面形を呈する。



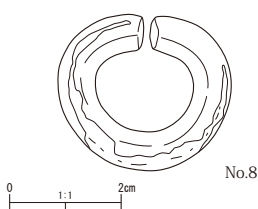
No.7

10 耳環 KT204-7

外径3.3cm、内径1.6cm、

断面径0.8cm×0.8cm 重量33g

中実の銅芯銀張鍍金環である。両平面および開口部は錆に覆われるが、内外の側面には鍍金が比較的良好に残る。

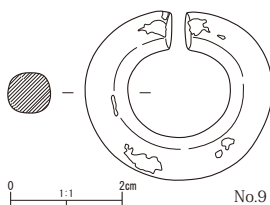


11 耳環 KT204-8

外径3.1cm 内径1.8cm

重量20g

中実の銅芯銀張鍍金環である。表面の錆化が進んで銀板の被せがやや視認しにくくなっているが、開口面まで銀板が及ぶ。鍍金も大部分が剥落しているが、一部に発色を確認できる。

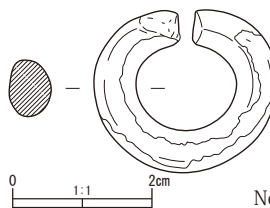


12 耳環 KT204-9

外径3.4cm 内径1.8cm

断面径0.8cm×0.7cm 重量27g

中実の銅芯銀張鍍金環である。全体的に錆が回るが、内側面を中心に鍍金の発色が良く残る。被せた銅板は開口面に折り込まれる。

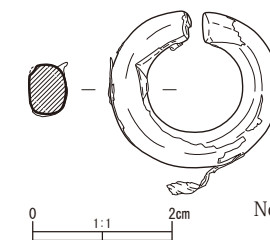


13 耳環 KT204-10

外径2.6cm 内径1.4cm

断面径0.6cm×0.8cm 重量18g

中実の銅芯銀張鍍金環である。銀板が大きく剥離するが、内側面には鍍金も遺存する。やや扁平な断面形を呈する。

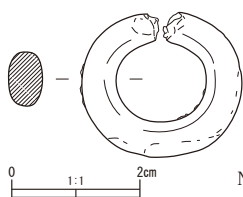


14 耳環 KT204-11

外径2.4cm 内径1.4cm

断面径0.5cm×0.7cm 重量11g

中実の銅芯銀張鍍金環である。銀張が大きく剥がれており、一部が浮いている。銀板は開口部に折り込まれている。断面はやや扁平である。



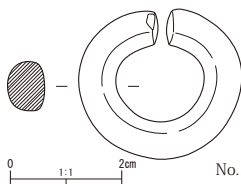
No.12

15 耳環 KT204-12

外径2.5cm 内径1.4cm

断面径0.5cm×0.8cm 重量14g

中実の銅芯銀張鍍金環である。全体的に緑青が回るが、外側面に一部鍍金を確認できる箇所がある。開口部には織り込まれた銀板が被る。断面はかなり扁平な形状を呈する。



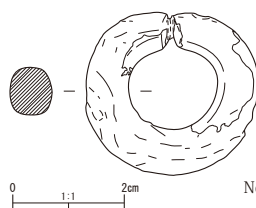
No.13

16 耳環 KT204-13

外径2.9cm 内径1.6cm

断面径0.7cm×0.9cm 重量21g

中実の銅芯銀張鍍金環である。緑青により全体が覆われており、鍍金が確認できるのは一部のみである。やや扁平な断面形を呈する。



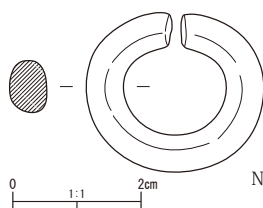
No.14

17 耳環 KT204-14

外径3.1cm 内径1.6cm

断面径0.8cm×0.8cm 重量26g

中実の銅芯銀張鍍金環である。遺存状態が不良で、銀板の大部分が剥落している。開口部も錆化のためつながっているが、銀板が開口部まで折り込まれているのを確認できる。



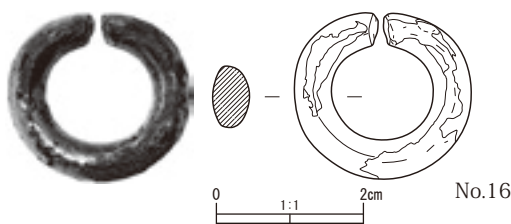
No.15

18 耳環 KT204-15

外径2.8cm 内径1.6cm

断面径0.6cm×0.8cm 重量20g

中実の銅芯銀張鍍金環である。表面に若干緑青が付着するが、鍍金の残りは比較的良好である。銀板は開口面にも被せられる。環の断面はやや扁平である。

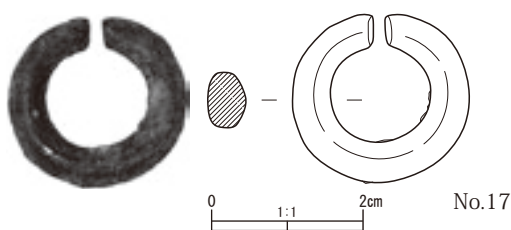


19 耳環 KT204-16

外径2.4cm 内径1.4cm

断面径0.5cm×0.8cm 重量14g

中実の銅芯銀張鍍金環である。全体に鍍金がよく遺存する。銀板は折り込まれて開口面を覆う。環の断面形はかなり扁平な形状である。

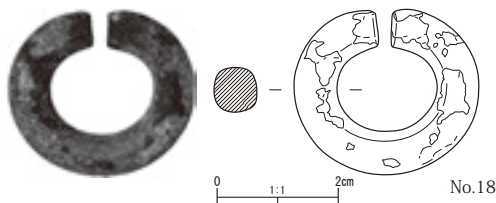


20 耳環 KT204-17

外径2.3cm 内径1.3cm

断面径0.5cm×0.7cm 重量10g

中実の銅芯銀張鍍金環である。全体的に銹化が進行しているが、わずかな鍍金の痕跡が随所に残る。緑青に覆われ不明瞭であるが、開口部まで銀張が及んでいるとみられる。環はやや扁平な断面形を呈する。

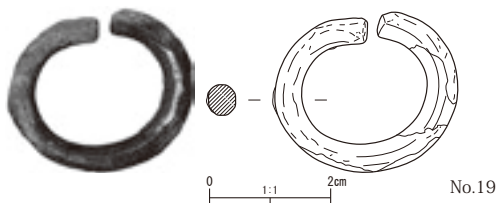


21 耳環 KT204-18

外径3.1cm 内径1.7cm

断面径0.7cm×0.7cm 重量21g

中実の銅芯環である。全面が緑青に覆われており、ところどころ銅地が露出しているが、銀張や鍍金の有無は肉眼観察では判別できない。蛍光X線分析でも銅だけが検出されている。

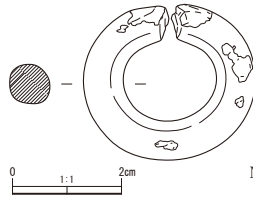


22 耳環 KT204-19

外径3.0cm 内径2.1cm

断面径0.5cm×0.5cm 重量9g

中実の銅芯銀張鍍金環である。本コレクションの中では、かなり細身なタイプに属する。銅芯に巻かれた銀板は大部分剥落しており、鍍金もほとんど残っていない。断面八角形を呈し、部位によってはかなり明瞭な稜をなす。



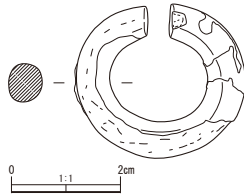
No.20

23 耳環 KT204-20

外径3.1cm 内径1.7cm

断面径0.7cm×0.7cm 重量21g

中実の銅芯銀張鍍金環である。緑青に覆われて鍍金の痕跡をはっきりと視認できないが、蛍光X線分析では金検出されており、鍍金が施されているものと推定される。銀板が巻かれ、端部を折り込んで開口部にも被せてある。



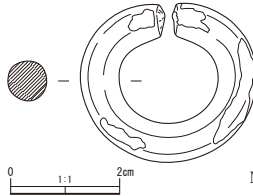
No.21

24 耳環 KT204-21

外径3.1cm 内径1.8cm

断面径0.6cm×0.7cm 重量19g

中実の銅芯銀張環である。鍍金は明確に確認できず、蛍光X線分析でも金は出ていない。銀板が大部分剥離し、銅地の表面も劣化している。



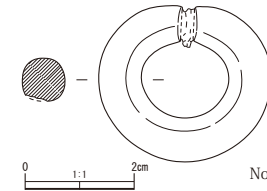
No.22

25 耳環 KT204-22

外径3.2cm 内径1.8cm

断面径0.7cm×0.7cm 重量24g

中実の銅芯銀張環である。銀板には鍍金を施してあるようにも見えるが、蛍光X線分析では金は検出されていない。銀板は部分的に破れが認められるが、開口部は折り込まれた銀板の端部が被せられている。



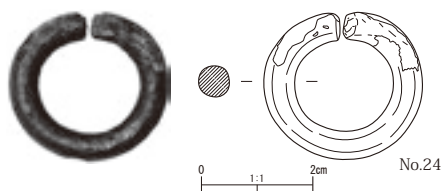
No.23

26 耳環 KT204-23

外径3.1cm 内径1.6cm

断面径0.8cm×0.8cm 重量27g

中実の銅芯銀張環である。鍍金のない銀板を巻いたものとみられる。銹化が進み、開口部が緑青に覆われてつながっている。

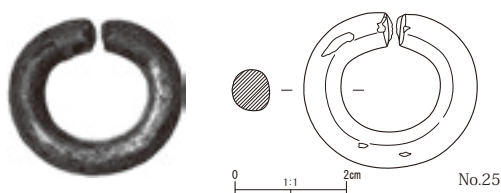


27 耳環 KT204-24

外径2.3cm 内径1.8cm

断面径0.5cm×0.6cm 重量9g

中実の銅芯銀張環である。明瞭な鍍金の痕跡は視認できず、蛍光X線分析でも金が検出されていない。被せられた銀板は開口部付近を中心に破損が認められるが、開口面には折り込まれた銀板の端部が遺存する。

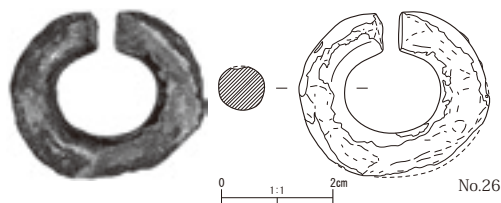


28 耳環 KT204-25

外径3.1cm 内径1.8cm

断面径0.7cm×0.7cm 重量15g

中実の銅芯銀張鍍金環である。銀張の遺存状態が良好で、開口面に折り込まれた端部をよく確認できる。内側面には発色のよい鍍金が残る。

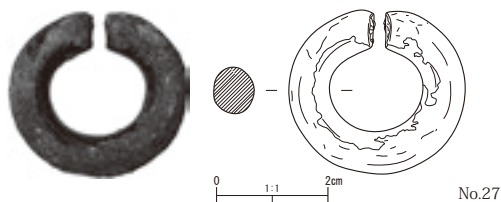


29 耳環 KT204-26

外径3.4cm 内径1.7cm

断面径0.8cm×0.8cm 重量22g

中実の銅芯銀張環である。遺存状態が悪く、錆化が進んで破裂を起こし、銀板が破れている。残っている銀板には明確に金色に発色する痕跡が認められず、蛍光X線分析でも金は検出されていないため、鍍金の有無は現状では不明である。

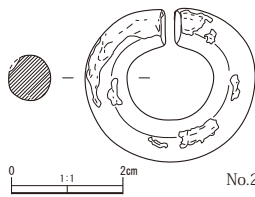


30 耳環 KT204-27

外径3.2cm 内径1.7cm

断面径0.7cm×0.8cm 重量23g

中実の銅芯銀張鍍金環である。銀板の多くは剥落してしまっているが、開口面を覆う銀板が一部遺存しており、端部を折りこんだ鍍を確認できる。鍍金はほとんど残っていない。



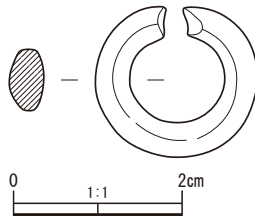
No.28

31 耳環 KT204-28

外径3.0cm 内径1.6cm

断面径0.8cm×0.8cm 重量24g

中実の銅芯銀張鍍金環である。被せた銀板が比較的良く残っており、銀板が開口面にまで及ぶのを確認できる。内側面を中心に鍍金の遺存も認められる。



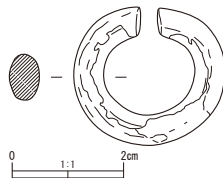
No.29

32 耳環 KT204-29

外径1.9cm 内径1.1cm

断面径0.4cm×0.7cm 重量8g

中実の銅芯鍍金環である。かなり小ぶり、銀板を巻かず銅芯に直接鍍金を施す。ただし、開口面には鍍金が及ばない。遺存状態が良く、金の発色も鮮やかである。環の断面はかなり扁平な楕円形を呈する。



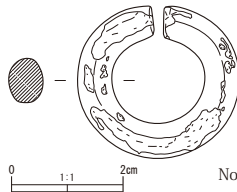
No.30

33 耳環 KT204-30

外径2.7cm 内径1.6cm

断面径0.5cm×0.8cm 重量17g

中実の銅芯環である。表面が劣化して大部分剥落しているが、銀の薄板を被せたものとみられる。わずかに金の発色を示す箇所が確認されるが、鍍金の痕跡かどうかは定かでない。環はかなり扁平な断面形を呈する。



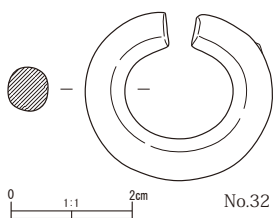
No.31

34 耳環 KT204-31

外径2.9cm 内径1.7cm

断面径0.6cm×0.8cm 重量18g

中実の銅芯環である。劣化にともないかなり剥がれてしまっているが、元来巻かれていた銀板を肉眼で確認でき、開口面まで銀板が及んでいる。環の断面はやや扁平である。

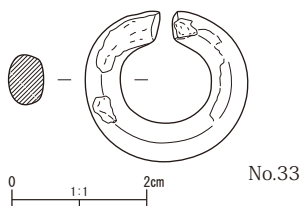


35 耳環 KT204-32

外径3.1cm 内径1.8cm

断面径0.7cm×0.7cm 重量18g

中実の銅芯環である。全体を緑青に覆われ、表面の観察が困難である。蛍光X線分析では銅しか検出されておらず、肉眼観察でも銀張や鍍金の痕跡などは確認できない。

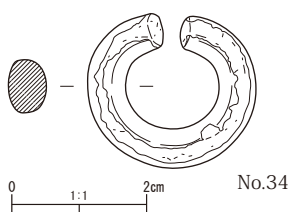


36 耳環 KT204-33

外径2.4cm 内径1.4cm

断面径0.5cm×0.7cm 重量14g

中実の銅芯銀張鍍金環である。内外側面を中心に鍍金が遺存している。開口面には、折り込まれた銀板の端部をわずかに確認できる。やや扁平な断面形をもつ。



37 耳環 KT204-34

外径2.5cm 内径1.4cm

断面径0.6cm×0.8cm 重量14g

中実の銅芯環である。蛍光X線分析では銀が検出されていないが、肉眼観察では他の多くの耳環同様、鍍金を施した銀板を巻いてあるように見える。環の断面形はやや扁平である。

三累環頭大刀柄頭【木村定三コレクション M317】



基部の台形状の高まり



C字開口部のつながり